

『シン・エヴァンゲリオン劇場版:||』

2021年／日本／総監督 庵野秀明

涙

会員 福島 亮仁 (72期)

本作品は1995年秋のテレビ放映版「新世紀エヴァンゲリオン」から始まった「エヴァ」シリーズの最新作である。シリーズは主に、全26話のテレビ放映版、第拾五話と最終話を映画化した旧劇場版、そしてこれらを「再構築」した新劇場版で構成される。

私は、この作品群の大ファンである。他にも好きなロボットアニメはあるが、「エヴァ」は特別である。本稿の執筆の話があった際、題材は、本作品以外には考えられなかった。

物語の舞台は、「セカンドインパクト」と呼ばれる大災害によって全人類の半数が死滅した世界。テレビ放映版は、主人公の碇シンジが、訳も分からぬまま「汎用人型決戦兵器人造人間エヴァンゲリオン」に乗って使徒と戦うことになる場面から始まる。そして、その後の戦いや、束の間の日常の中で、この14歳の主人公の内面は、葛藤とともに様々に移ろう。その様子は、全編を通じて生き生きと、かつグロテスクに描写されていく。一方で、物語の世界は、「人類補完計画」という計画のもと、謎の秘密結社「ゼーレ」のシナリオどおりに進んでいることが明かされるが、その具体的内容は直接にはほとんど語られない。最終話に近づくにつれ、主人公の精神世界と、その外側の世界、更には画面の外の現実世界とが混ざり合って描写され、視聴者は混乱に突き落とされる。そして、解釈の手がかりがほとんど与えられないまま終局を迎える。ぜひテレビ放映版と旧劇場版の両方を確かめて頂きたい。

新劇場版も、テレビ放映版と同じく、主人公の碇シンジが理由も分からぬままエヴァに乗って使徒と

戦うところから始まる。舞台もこれまでと同じ「第3新東京市」と呼ばれる無機質な都市。ただ、物語の設定には、いくつかテレビ放映版と違う点がある。そして、線路の分岐器が切り替わり、列車が別の軌道を進んでいくように、物語は次第に、テレビ放映版とは大きく異なった方向に展開していく。

新劇場版の最終作である本作品では、テレビ放映版以来のストーリーが完結する。本作品において明かされた謎もあったが、やはり全ては語られず、更に積み増された謎もある。私は映画館で2回見たが、それだけでは全体の半分も理解できなかった。

ただ、「第3村」と呼ばれる集落でのシーンはとても印象的だった。世界が異常な状況にある中で、それと対照的に描写される日常の様子は、「エヴァ」の醍醐味の一つ。第3村で生きる人々の表情は、今までにない丁寧な描かれていた。それは90年代以降に日本が経験した大災害の記憶と重なり、その中で遅く暮らす人々の尊さに、私は思わず涙してしまった。大きな困難の中でも、人々が互いに補い合い、暮らしを続けていく。その姿に心を動かされた。主人公が望んだこの「相補性のある世界」をめぐっては、本作品の最終盤でも、登場人物の間で極めて印象的なやりとりがされる。そこには、「エヴァ」が完結した後の現実を、私たちが精いっぱい生きられるようにとの意図が込められているような気がした。

「エヴァ」は、現代を何とか暮らしていくための力を、全ての人にも与えてくれる作品である。読者には、本作品だけでなく、シリーズ全作品の鑑賞を勧めたい。